

〔研究論文〕

中学校における不登校「教育的予防」のための社会的能力の育成
-不登校傾向を示す生徒に着目して-

Promoting Junior High School Students' Social Abilities for "Educational Prevention" of School Non-Attendance:
Focusing on students with a tendency of School Non-Attendance

佐竹 真由子
Mayuko SATAKE

小 泉 令 三
Reizo KOIZUMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース/
福岡県直方市立直方第二中学校

福岡教育大学教職実践ユニット

(2020 年 1 月 31 日受理)

本研究は、登校しているすべての生徒の社会的能力向上のために、一次的援助サービスとして社会性と情動の学習の中の SEL-8S プログラム (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School) を、中学 2 年生を対象として実施し、周囲の人々や集団と良好な関係をもつ力を身に付けることで不登校の未然防止に効果があるかを検証した。その際、通常の学級で学んでいる生徒のうち、前年度に 10 日以上欠席している生徒を「不登校傾向生徒」とし、それ以外の生徒を「登校生徒」と群分けした。不登校傾向生徒の特徴をふまえた SEL-8S プログラムユニットを 8 か月間で 7 回実施した結果、不登校傾向生徒の SEL-8 JHS 尺度Ⅱの生活上の問題防止スキル、応用的社会的能力、社会的能力全般で交互作用が上昇の傾向を示した。いずれも不登校傾向生徒の得点が上昇する傾向にあった。また、学校環境適応感(ASSESS)の教師サポートは登校生徒・不登校傾向生徒ともに得点の上昇が見られた。

キーワード：不登校， 不登校傾向， 社会的能力， 社会性と情動の学習， SEL-8S プログラム

問題と目的

不登校児童生徒数は高水準で推移しており、生徒指導上の喫緊の課題となっている。生徒指導リーフ「不登校の予防」(国立教育政策研究所生徒指導・進路指導教育センター, 2014) では、不登校の防止のため学校で取り組むべき対策として「教育的予防」と「治療的予防」の 2 つを挙げている。「教育的予防」とは、すべての児童生徒が将来にわたって自ら問題を回避・解決していけるような大人に育つことを目標とした働きかけである。「治療的予防」とは、早期発見・早期対応の考え方で、学校を休み始めた児童生徒への個別対応を軸とした働きかけである。これらのうち、「教育的予防」

こそ、不登校の未然防止の大きな柱となる。

平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果(文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2019)における「不登校になったきっかけと考えられる状況」によると、不登校の要因を「本人に係る要因」で見ると、『不安』の傾向がある」では、「家庭に係る状況 (31.3%)」, 「いじめを除く友人関係をめぐる問題 (30.6%)」が多く、『無気力』の傾向がある」では、「家庭に係る状況 (46.7%)」, 「学業の不振 (32.3%)」が多い。『学校における人間関係』に課題を抱えている」では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題 (72.4%)」が突出している。このことから、学校生活における人間関係の課題が不登

校のきっかけになっていることが多いことがわかる。滝川（2017）は、不登校が増加した要因の一つに、産業構造・社会構造の転換に伴って、学級内での子ども同士の対人関係や交友が緊張性や過敏性を帯びやすくなったことを指摘している。土井（2008）は、最近の中学校では、学級の中に気の合う数人の少人数グループが複数存在し、狭いグループの中でのみ人間関係が形成されているとし、金山・小野（2006）は、円滑な対人関係に必要な社会的スキルが不足している子どもは社会的不適応に陥るリスクが高いとしている。

生徒指導リーフ「不登校の予防」（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導教育センター、2014）では、「不登校という事象に対して学校がまず取り組むべきことは、全ての児童生徒が学校に来ることを楽しいと感じ、学校を休みたいと思わせないような、日々の学校生活の充実である」としている。学校生活の中で生じるトラブルを自力で乗り越え、友だちとの関係を適切にもつことができる力を身に付けることができると、日々の学校生活が充実したものとなる。そしてどの生徒にとっても学校が楽しいと感じることが、結果として不登校の未然防止につながると考えられる。さらに、児童生徒の社会的能力を高めて、友人関係を向上させることは、児童生徒一人一人が将来自らの問題を回避・解決できる大人へと成長することとなる。

社会的スキルに関して、江村・岡安（2003）は、中学校1年生を対象に学級を単位とした集団社会的スキル教育を約半年で総合的な学習の時間を利用して8セッション行った結果、孤独感が減少し、友人サポートが上昇していたと報告している。この長期にわたる体系的な集団社会的スキル教育を行うことは、生徒の社会的能力を向上させ、人間関係を良好な状態に保つ上で有効な方法であると思われる。

本研究では、SEL-8S プログラム（Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School）を用いて社会的能力の向上を図ることを目指す。SEL-8S プログラムとは、社会性と情動の学習、すなわち「自己の捉え方と他者との関わり方を基盤

とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」（小泉・山田、2011）の中の1つのプログラムである。このプログラムは8つの社会的能力の育成を目的とし（表1）、望ましい態度についてロールプレイ（役割演技）を行い、適切なスキルを習得させる（図1）。このプログラムを学校教育計画の中に位置づけ、継続した実施により、生徒の社会的能力の向上を目指す。

また、登校しつつも「学校に行きたくない」と感じている子どもの存在は従来から指摘されている。森田（1991）は、「学校へ行くのが嫌になる」という登校を回避する感情を示す生徒は、実際には登校している生徒の中に一定数存在し、「潜在的な不登校への可能性を持った層」として不登校現象の大きな裾野の広がりの中に組み込んで考察する必要があるとしている。五十嵐・萩原（2004）はこれらの層を「不登校傾向」とし、不登校の前駆的状态としてとらえている。赤羽根・宮崎・小池・河崎（2016）は、小学校のいずれかの学年で年間10日以上欠席経験を有する生徒は中学校入学後に不登校になる可能性が高くなるとしている。本研究においては、不登校の発生が増える1年次に10日以上欠席がある生徒を「不登校傾向生徒」とし、検証の対象とした。以上、本研究では、一つ学年（第2学年）の全学級を対象に、SEL-8S プログラムの授業実践を行い、社会的能力と学校適応感の向上についての有効性を検証することを目的とした。

方法

実施期間

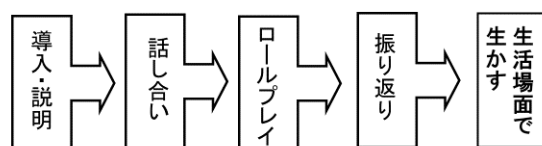
201X年5月から201X+1年1月まで

参加者

A 中学校2年生全学級（203名）が参加した。集計では1年次に欠席が10日未満の生徒162名（登校生徒：男78名、女84名）と、欠席が10日以上生徒17名（不登校傾向生徒：男9名、女8名）に分けた。

表1 SEL-8S でねらいとする8つの能力

社会的能力	能力
基礎的な社会的能力	自己への気づき
	他者への気づき
	自己のコントロール
	対人関係
	責任ある意思決定
応用的な社会的能力	生活上の問題防止スキル
	人生の重要事態に対処する能力
	積極的・貢献的な奉仕活動



- ・大切なことを語呂合わせとシンボルで提示し覚えやすくする。
- ・ロールプレイ（役割演技）で適切なスキルを習得させる。

図1 SEL-8S 授業の構成

効果測定

学校環境適応感尺度 (ASSESS) (栗原・井上, 2013) (34 項目・5 件法) を用いて、6 つの因子 (生活満足感, 教師サポート, 友人サポート, 向社会的スキル, 非侵害的関係, 学習的適応) の自己評定を求めた。

中学生用社会性と情動の学習 8 つの能力尺度 II (SEL-8 JHS 尺度 II) (小泉・米山, 2020) (26 項目・4 件法) を用いて、生徒の 8 つの能力 (自己への気づき, 他者への気づき, 自己のコントロール, 対人関係, 責任ある意思決定, 生活上の問題防止スキル, 人生の重要事態に対処する能力, 積極的・貢献的な奉仕活動) の自己評価を求めた。さらに 5 つの基礎的社会的能力の平均, 3 つの応用的社会的能力, 8 つの社会的能力の平均を算出した。

これら 2 つの尺度については、5 月, 12 月の 2 回調査を実施した。その他出席状況調査, 授業ごとの生徒の振り返りの自由記述や教師事後アンケートも実施した。教師事後アンケートは、「授業の取り組みやすさ」と「生徒の取り組む姿勢」について、4 大変良い, 3 やりやすい, 2 少しやりにくい, 1 やりにくいの 4 件法でたずねるものと、自由記述の 2 つの項目で行った。

授業実践

授業は学年の教師 10 名が担当した。報告者は生徒指導部生徒支援係として実践に参加した。「社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方」をもとに、表 2 のようにユニットを設定した。ユニット構成については、学習内容を実際の活動に生かしやすい学校行事・総合的な学習の時間の事前学習として行うプログラム (2 回), 不登校傾向生徒は友だちとのかかわりに課題をもつため、友達とのか

かわりに関するプログラム (2 回), 心理的ストレス反応が高い生徒に対してストレスマネジメント教育を行うことにより生徒のストレス反応が軽減し, 不登校感情が軽減するという先行研究 (三浦, 2006) から, ストレスに関するプログラム (3 回) の計 7 回とした。ストレスに関するプログラムについては, スクールカウンセラー (SC) がチームティーチング (TT) の T2 となり, 生徒への助言を行った。

①「状況に応じたあいさつ」 6 月上旬から行われる職場体験に向けて, 体育館にて 2 年生全員を対象に報告者が授業を行った。望ましいあいさつの仕方について学び, 代表生徒に模範演技を行なわせた。その後グループに分かれてロールプレイを行った。授業後は, 望ましいあいさつ「『おかめ』のあいさつ」のポスターを拡大コピーして学年掲示板に掲示した。その後の職場体験事前指導でももう一度生徒に問いかけ, 意識づけを行った。

②「わかりやすく伝えよう」 7 月に修学旅行の話し合い活動の事前学習として行った。2 年生全学級の各教室で報告者が授業を行った。T2 に担任, 学年主任が入り, 伝え方の良い例と悪い例を示した。ロールプレイのやり方がわからない生徒に学級担任が声をかけた。

③「短所を乗り越える！」 この回から各学級担任が T1 として授業を行った。T2 に SC が入り, 短所の別の見方について助言を行った。はじめに「自分理解」としてエゴグラムを実施し, 短所と長所を出し合い, 別の見方について話し合った。事後は授業に関連した SC 通信を生徒に配付し, 2 年の掲示板に掲示した。

④「ストレスマネジメント」 SC が T2 として入り,

表 2 学級での SEL-8S プログラムユニット

月	日	内容	ねらい	指導形態
5	23	①「状況に応じたあいさつ」A5 *	職場体験の事前指導として, 気持ちのよい挨拶を行うことができる。	T1 報告者 T2 各学級担任
7	12	②「わかりやすく伝えよう」C2 *	修学旅行の班活動に向けて, 自分の意見を相手に上手に伝えることができる。	T1 報告者 T2 各学級担任
10	3	③「短所を乗り越える！」B2 *	自分のことを知り, 短所を克服する方法を考える。 ※SC との連携	T1 各学級担任 T2 SC
10	31	④「ストレスマネジメント」F3 *	ストレスの種類を知り, その対処法を学ぶ。 ※SC との連携	T1 各学級担任 T2 SC
11	15	⑤「友だちが怒っちゃった! ?」D4 *	友人間でトラブルが起こったときの解決法を身に付ける。	T1 学級担任 T2 報告者
11	29	⑥「冷静に伝える」J D6 *	自分の気持ちを抑えて冷静に状況を判断する力を身に付ける。	T1 各学級担任 T2 報告者 学年主任
1	17	⑦「ポジティブに考えよう」F3 *	自分の体調や気持ちの変化に気づき, 適切な対処が取れる。 ※SC との連携	T1 各学級担任 T2 SC

* の英数字は SEL-8S のユニット構成を表す。

ストレス解消法について説明した。まず、ストレスの種類とストレス対処法について考えさせた。その後班で交流し、ストレス対処法の分類分けを行った。後半はストレスを和らげるための呼吸法、リラックス体操、イメージトレーニングなどをSCが紹介した。

⑤「友だちが怒っちゃった!？」人間関係においてトラブルが起きた時、解決のポイントを理解し、実際にトラブルが起きたとき自分で解決することができるようになるための学習である。まず、友だちとトラブルになったときどうしているかをチェックしてから、解決のポイントの「トラブル解決4兄弟」について学習した。

⑥「冷静に伝える」怒りを冷静に伝えるための「こころの信号機」モデルを理解し、「I（私）メッセージ」で自分の気持ちや思いを伝えるロールプレイを行った。

⑦「ポジティブに考えよう」はじめに、生徒に自分の心の状態に気づかせるため、心の健康チェックを行った。そして悲観的な考え方の例を挙げて班で話し合った。その後、前向きな考え方にするにはどう変えたら良いか意見を出し合った。

SC との協働(③④⑦)

授業の準備は報告者が行った。資料などはSCが作成し、授業実践は学級担任がT1で行った。授業の実施1週間前に学年職員と報告者、SCで指導案検討を行った。学級担任とのTTということで、少人数グループでの話し合いでは担任が主導し、リラックスのための呼吸法や、ストレスから起こる身体症状など専門的な話はSCが行った。授業実施後は報告者が研究通信を作成し、全職員に研究の内容を知らせた。SCは生徒用の通信を作成して配布し、呼吸法などを生徒が自宅でも実施できるようにした(図2)。

生徒の実態把握のための研修会

6月15日に、第1回調査で明らかになった学級の実態や個人の特性について、ASSESS、SEL-8JHS 尺度Ⅱの2種類のグラフと小学4年次からの

欠席日数、今年度の欠席日数を月ごとに記録した個人カルテ「お助け君」(木村・小泉, 2017)を用い、学年研修会を行った。学級分布図と個人カルテを見比べながら、経年で欠席日数が増加している生徒について話し合った。

2回目の研修会は、1月10日に、第2回調査結果をもとにASSESS 学級平均表と学級内分布表の検討と、「お助け君」で生徒の変容を確認した。

結果

SEL-8JHS 尺度Ⅱの変化

平均値と標準偏差をもとに、群(登校生徒・不登校傾向生徒)×時期(5月・12月)の2要因分散分析を実施した。その結果、他者への気づき、生活上の問題防止スキル、積極的・貢献的な奉仕活動、応用的社会的能力、社会的能力全般で不登校傾向生徒の得点が上昇する傾向にあった(表3, 図3a~e)。

学校適応感(ASSESS)の変化

SEL-8JHS 尺度Ⅱと同様の分析を行ったところ、教師サポートと向社会的スキルの交互作用に有意な傾向が見られた。教師サポートは登校生徒・不登校傾向生徒ともに得点が上昇する傾向にあった(表4, 図3f, g)。

出席率の変化

1学期と2学期の出席率(出席日数/出席すべき日数)について、SEL-8JHS 尺度Ⅱと同様の分析を行った結果、交互作用が有意であった。不登校傾向生徒の2学期の出席率が低下していた(表5)。

生徒の学習前後の反応

学校行事・総合的な学習の時間の事前学習として(①②③)「状況に応じたあいさつ」では、ロールプレイを繰り返すうちに少しずつ相手の顔を見て話ができるようになってきた。職場体験学習終了後に各事業所に行ったアンケートでは、「挨拶や返事ができるようになった」という項目について、45事業所のうち32事業所で「変化があった」という回答が得られた。「わかりやすく伝えよう」の振り返りアンケートでは、「修学旅行でトラブルになりそうとき今日習ったことを使いたい」という回答が得られた。

SCとの連携(③④⑦) SCとTTで行った授業の後、SCに「今度話しに行ってもいいですか。」と尋ねてきた生徒がいて、SCと生徒をつなぐきっかけになった。SCの学校での業務は基本的に対個人で行われるので、学校に通うすべての生徒が対象となる授業で顔を合わせる機会を設けたことは、生

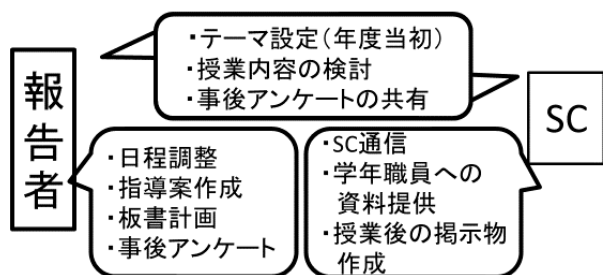


図2 SC との連携による授業準備と事後指導

表3 SEL-8 JHS 尺度Ⅱの得点と分析結果

	登校生徒 (n=162)				不登校傾向生徒(n=18)				分散分析結果					
	5月		12月		5月		12月		主効果 [偏η ²]		主効果 [偏η ²]		交互作用 [偏η ²]	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	(群)	df=1/177	(時期)	df=1/177	df=1/177	
自己への気づき	48.75	13.18	47.56	11.84	45.04	8.80	46.18	12.52	0.98	0.01	0.01	0.01	0.40	0.01
他者への気づき	45.72	11.34	46.57	12.40	44.24	12.56	49.54	9.63	0.08	0.01	5.28	0.03 *	2.76	0.02 +
自己のコントロール	48.95	10.06	48.25	10.84	49.89	7.05	49.33	9.87	0.19	0.01	0.27	0.01	0.01	0.01
対人関係	46.79	10.08	47.36	11.52	40.18	9.99	44.26	12.06	3.85	0.02 +	3.53	0.02 +	2.01	0.01
責任ある意思決定	50.51	25.41	48.10	10.88	41.43	12.27	45.04	10.05	2.76	0.02 +	0.04	0.01	0.90	0.01
生活上の問題防止スキル	50.33	10.11	50.69	10.34	45.31	12.04	49.88	10.28	1.51	0.01	4.59	0.03 *	3.35	0.02 +
人生の重要事態に対する能力	48.72	11.28	45.83	11.92	46.20	12.78	43.67	13.97	0.78	0.01	3.71	0.02 +	0.02	0.01
積極的・貢献的な奉仕活動	48.50	9.93	48.03	10.36	44.78	11.56	48.54	8.82	0.48	0.01	1.98	0.01	3.29	0.02 +
基礎的社会的能力	48.14	8.84	47.57	8.35	44.16	7.01	46.87	6.96	1.56	0.01	1.00	0.01	2.37	0.01
応用的社会的能力	49.18	7.05	48.18	7.67	45.43	6.31	47.36	7.56	1.78	0.01	0.39	0.01	3.88	0.02 +
社会的能力全般	48.53	7.46	47.80	7.53	44.63	5.99	47.05	6.28	1.88	0.01	1.03	0.01	3.62	0.02 +

** p < .01

* p < 0.5

p < .10

** p < .01 * p < 0.5 + p < .10

表4 学校環境適応感尺度 (ASSESS) の得点変化

	登校生徒 (n=162)				不登校傾向生徒(n=18)				分散分析結果					
	5月		12月		5月		12月		主効果 [偏η ²]		主効果 [偏η ²]		交互作用 [偏η ²]	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	(群)	df=1/177	(時期)	df=1/177	df=1/177	
生活満足度	52.98	11.20	52.87	11.44	50.41	10.44	54.47	16.12	0.85	0.01	0.17	0.01	0.15	0.01
教師サポート	50.11	11.70	52.54	12.47	49.52	10.36	56.23	14.70	0.30	0.01	13.31	0.07 **	2.91	0.02 +
友人サポート	57.14	14.20	56.79	13.23	54.47	11.30	56.29	13.36	0.28	0.01	0.17	0.01	0.38	0.01
向社会的スキル	57.20	12.16	56.20	11.76	52.29	6.95	56.23	9.29	0.82	0.01	1.32	0.01	3.74	0.02 +
非侵害関係	52.59	12.07	52.80	12.21	54.35	12.79	55.23	16.47	0.58	0.01	0.12	0.01	0.05	0.01
学習の適応	48.56	12.36	48.08	11.99	39.70	8.34	42.58	11.74	6.39	0.03 *	1.10	0.01	2.16	0.01
** p <.01 * p <0.5 + p <.10														

** p < .01 * p < 0.5 + p < .10

表5 出席率の変化

	登校生徒 (n=176)				不登校傾向生徒(n=26)				分散分析結果					
	1学期		2学期		1学期		2学期		主効果 [偏η ²]		主効果 [偏η ²]		交互作用 [偏η ²]	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	(群)	df=1/200	(時期)	df=1/200	df=1/200	
出席率	0.97	0.11	0.97	0.13	0.81	0.20	0.74	0.26	49.00	0.20 **	20.24	0.09 **	15.04	0.07 **
** p < .01 * p < 0.5 + p < .10														

** p < .01 * p < 0.5 + p < .10

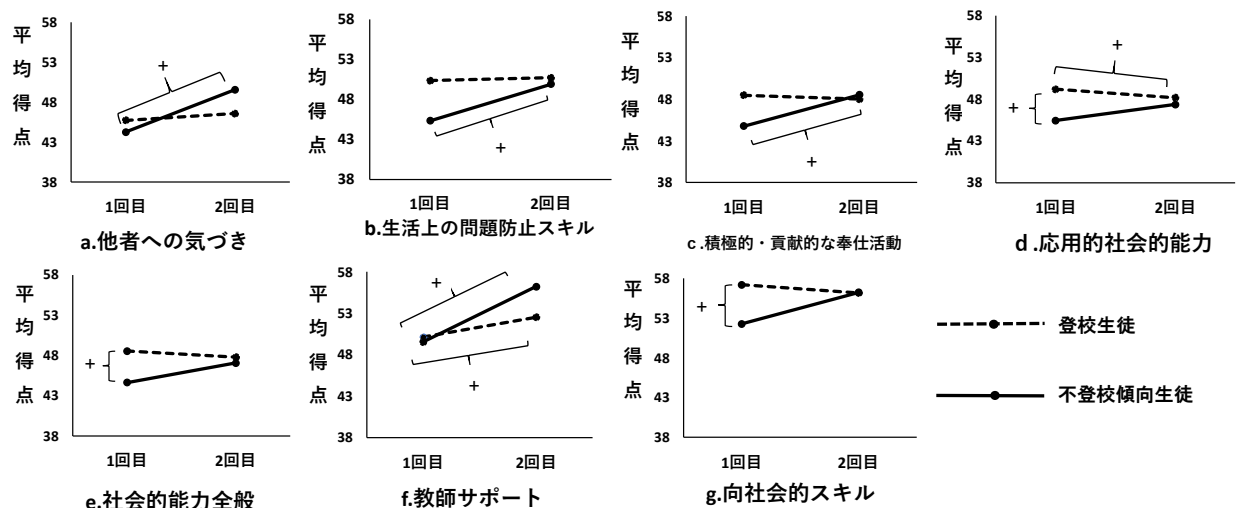


図3 SEL-8JHS 尺度Ⅱ (a～d) と ASSESS (f, g) の得点変化

徒がSCについて知る機会となった。また、エゴグラムやストレスチェックなどを通して生徒が自分の性格の傾向を知り、自己理解が深まることとなった。授業で取り扱ったリラクソのための呼吸法を、生徒が授業後に実際にやっている姿が見ら

れた。また、生徒の感想からは、「私はストレスを感じやすいので、部活の大会など、とても緊張してストレスを感じてしまうのでこれから生かしていこうと思いました。」との意見が得られた。SCからは、「『こころの健康についての勉強なん

か自分には関係ない』『ストレスといわれても実感が無い』と感じている生徒たちが自分の日々の状況を振り返り内省する時間をもつことで、自己理解が深まったりしていた。」との報告があった。

友だちとのかかわりに関するプログラム(⑤⑥)

「友だちが怒っちゃった!？」では、トラブルに対して、「相手がアクションを起こすまでじっと待つ」や「トラブルの存在を忘れる」など、トラブルに対して行動しないと答えた生徒が見られた。学習後の振り返りでは、「まずゆっくり考えて解決方法をさがり、それを実行するやり方でいけば解決できるかもしれません」という回答が得られた。

不登校傾向生徒の反応

人間関係に対する苦手意識をもち、ストレス耐性の弱さを課題とする不登校傾向生徒の、授業後の感想は以下の通りである。

④「**ストレスマネジメント**」 「もし、ストレスをかかえた時は、人に相談したり、深呼吸したりしようと思いました。大会の3日前とかで、緊張して、ストレスをかかえた時は人一倍練習して、少しでも自信にかえられるようにしようと思いました。」

⑤「**友だちが怒っちゃった?**」 「今後もし、何かケンカなどをしたら、このような解決法をしたいと思いますし、解決することが大切だと思いました。」

⑥「**冷静に伝える**」 「毎日使っている言葉だけど、一言一言を大切にし、考えてから言おうと思いました。これからたくさんの人と話すことがあると思うので気をつけていきたいです。」

教師事後アンケート

「授業の取り組みやすさ」, 「生徒の取り組み姿勢」どちらの項目についてもすべての実践で4または3の評価が得られた。自由記述では、「この学習により人間関係を円滑に進めるコツをつかんできたようである」「友だちに対しての対応がやさしくなった」「一人一人が課題に対して自分なりに考えることができていた」「プログラム終了後、物事を前向きに考えていく姿があった」という回答が得られた。学年職員は生徒の気持ちの変容を感じているようであった。

考察

本研究では、不登校の「教育的予防」として未然防止の観点から、すべての生徒に対しての一次的援助サービスにSEL-8Sプログラムを取り入れ、8か月間に7回実施した。その際、すべての生徒のうち前年度の欠席日数が10日以上の子を「不登校傾向生徒」に群分けし検証を行った。その結

果SEL-8JHS尺度Ⅱの「他者への気づき」「生活上の問題防止スキル」「応用的社会的能力」「社会的能力全般」と、ASSESSの「教師サポート」「向社会的スキル」の得点が上昇する傾向が見られたことから、不登校傾向生徒にとってSEL-8Sプログラムの実践は有効であったと推察される。

国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2005)は、不登校の「未然防止」の対応として、①基礎的情報の収集と分類、②対人関係への配慮、③チームによる対応、④対人関係の改善、⑤学習面の改善、⑥夏季休業中の取組を挙げている。本研究においては、上記の中の①③④について実践の成果があったと考えられる。

まず、①基礎的情報の収集と分類について、滝(2009)は、不登校対策において、不登校児童生徒の総数ではなく個々の学年群の推移を比較する必要があるとしている。本研究では、登校している生徒を前年度の欠席日数で「登校生徒」と「不登校傾向生徒」に群分けし検討したことと、個人カルテ「お助け君」において経年の欠席日数を把握し生徒理解の手段としたことは、不登校になる前の、不登校傾向生徒を二次的援助につなぐ取組であったと考える。

次に、③チームによる対応について、西山(2018)は、児童生徒の学校適応のため、援助資源をより有効に活用する「協働」の必要性を述べている。本研究において、プログラムユニットの実施にSCとの連携を取り入れ、ストレスマネジメント教育に取り組んだことは、協働的な不登校未然防止対策となったと考えられる。さらにSCが直接生徒に教える場面を設定したSEL-8Sプログラムの実践は、生徒のサポート希求の姿から、教師のみで行う実践以上の効果があったと推察される。

最後に、④対人関係への改善について、五十嵐(2011)は、中学校段階において、学習、健康維持、コミュニケーションスキルが不登校傾向に関連しているとしている。不登校傾向生徒のSEL-8JHS尺度Ⅱ「他者への気づき」「生活上の問題防止スキル」「積極的・貢献的な奉仕活動」「応用的社会的能力」の得点が上昇する傾向を示していたことから、SEL-8Sプログラムに対人関係に関するユニットを仕組み実施したことで、不登校傾向生徒の人間関係におけるコミュニケーションスキルが向上する可能性が示された。また、登校生徒の振り返りに、「この学習はとても大事なもので、学校に来てない人や、教室に入れない人は何かのストレスやいやなことがあって、そのストレスがたまっていたんじゃないかと思いました。」との

感想があったことから、生徒が周りの状況について理解しようとする態度の育成にもつながったと考えられる。

今後の課題として、本研究の実施期間において出席率が改善しなかったことについては、校内研修や学年会で個人カルテ「お助け君」を用いた情報の共有を今後も継続して行っていく必要がある。滝(2009)は、不登校未然防止の対策として、子どもに身に付けさせるべき能力、子どもが育むべき能力を明示し、それらを獲得させるのが学校の責任であり、学校全体で計画的に取り組むべきであるとしている。今後は小中連携を含めた生徒の実態把握と、「不登校未然防止」を視点に置いた SEL-8S プログラムの実施の継続が必要である。

引用文献

- 赤羽根直樹・宮崎英夫・小池 守・河崎雅人 (2016). 中学校における不登校発生要因の解明に関する実践的研究 帝京科学大学教職指導研究 1, 1-8.
- 土井孝義 (2008). 友だち地獄:「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房
- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, 51, 339-350.
- 五十嵐哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育心理学研究, 59, 64-76.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究 52, 264-27
- 木村敏久・小泉令三 (2017). 個人カルテ「お助け君」
- 小泉令三・山田洋平 (2011). 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房
- 金山元春・小野正彦 (2006). 中学生に対する集団社会的スキル訓練 教育実践総合センター研究紀要 15, 77-84
- 小泉令三・米山祥平 (2020). 「中学生用社会性と情動の学習 8 つの能力尺度Ⅱ」(SEL-8JHS 尺度Ⅱ)の作成 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 6, 1-10.
- 栗原慎二・井上 弥 (2013). アセスの使い方・活かし方 ほんの森出版
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2005). 中 1 不登校の未然防止に取り組むために-平成 13-15 年度「中 1 不登校生徒調査」から-
- 三浦正江 (2006). 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討-不登校予防といった視点から - 教育心理学研究 54, 124-134
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2019). 平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
- 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター (2014). 生徒指導リーフ-不登校の予防- Leaf. 14
- 森田洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 学文社
- 西山久子 (2018). 一次的援助サービスが定着する学校づくり 水野治久・家近早苗・石隈利紀(編) チーム学校での効果的な援助-学校心理学の最前線-. ナカニシヤ出版
- 滝 充 (2009). 「中 1 不登校調査」再考-エヴィデンスに基づく未然防止策の提案-国立教育政策研究所紀要, 138, 1-5
- 滝川一廣 (2017). 子どものための精神医学 医学書院

